

しんぱん しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいよんしょう ぶつぽう しゃかい
第四章 仏法と社会

じんせい い かた
人生・生き方

ぐにん 褒
愚人にほめられたるは第一のはじなり。

かいもくしよう
005 開目抄

じんせい い かた
人生・生き方
121 ページ 11 行

ぐにん
愚人にほめられることは最大の恥です。

われ しゆじよう むしこうごう このかた みようほうれんげきよう によいほうしゆ

我ら衆生、無始曠劫より已来、妙法蓮華經の如意宝珠を

かたとき あいはな むみよう さけ 誑 ころも

片時も相離れざれども、無明の酒にたぼらかされて、衣

うら 掛 知 すぐ え た おも

の裏にかけたりとしらずして、少なきを得て足りぬと思ひ

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ すみ

ぬ。南無妙法蓮華經とだに唱え奉りたらましかば速やか

ほとけ な しゆじよう ごかいじゅうぜんとう

に仏に成るべかりし衆生どもの、五戒十善等のわずか

かい てん う だいぼんてん たいしやく

なる戒をもつて、あるいは天に生まれて大梵天・帝釈の

み な おも とき ひと う

身と成つていみじきことと思ひ、ある時は人に生まれて

もろもろ こくおう だいじん くぎよう てんじようびととう み な

諸の国王・大臣・公卿・殿上人等の身と成つて、これ

ほど 樂 おも すぐ え た おも

程のたのしみなしと思ひ、少なきを得て足りぬと思ひ、

よろこ

悦びあえり。これを仏は、ほとけ「夢の中のさかえ、まぼろし

樂

のたのしみなり。ただ法華經を持ち奉り、速やかに仏

成

になるべし」と説き給えり。

と

たま

016 主師親御書

しゅししんごしよ

人生・生き方 じんせい い かた
320 ページ 13 行

しゅらどう

しかん

いち

い

こころ

ねんねん

つね

修羅道とは、止観の一に云わく「もしその心、念々に常

かれ まさ

ほつ

た

ひと

くだ

た

かる

に彼に勝らんことを欲し、耐えざれば人を下し、他を軽し

おのれ たつと

とび

たか

と

くだ

み

め、己を珍ぶこと、鵠の高く飛んで下し視るがごとし。

そと

じん

ぎ

れい

ち

しん

あ

げぼん

ぜんしん

しかも、外には仁・義・礼・智・信を揚げて下品の善心を

お

あしゅら

どう

ぎよう

起こし、阿修羅の道を行ずるなり」

じつぽうかいみよういんがしよう

026 十法界明因果抄

じんせい

い

かた

人生・生き方

464

ページー14行

だいく ぼさつかい

ろくどう

ぼんぷ

なか

じしん

から

第九に菩薩界とは、六道の凡夫の中において、自身を軽ん

たにん

おも

あく

おのれ

む

ぜん

じ他人を重んじ、悪をもつて己に向け、善をもつて他に

あた

おも

ものあ

与えんと念う者有り。

026 十法界明因果抄

じつぽうかいみよういんがしやう

じんせい

い

かた

人生・生き方

469

ページー5行

りんじゅう

いま

し

がまんへんしゅう

みょうもん

臨終すでに今にありとは知りながら、我慢偏執・名聞

りよう じゃく

みょうほう とな たてまつ

こころざし

利養に著して妙法を唱え奉らざらんことは、志の

ほどむげ 甲斐

程無下にかいなし。

030 持妙法華問答抄

じみょうほつけもんどうしやう

じんせい

い かた

人生・生き方 517 ページ 3 行

しょうがい 幾

生涯いくばくならず。思えば一夜のかりの宿を忘れて、

みょうり

え

え

ゆめ

なか

いくばくの名利をか得ん。また得たりとも、これ夢の中の

さか

めずら

たの

栄え、珍しからぬ楽しみなり。

じみようほつけもんどうしよう

030 持妙法華問答抄

じんせい

い

かた

人生・生き方

517 ページー11行

じやつこう みやこ

みなく

ほんがく すみか

寂光の都ならずば、いずくも皆苦なるべし。本覚の栖

はな なにごと たの

を離れて、何事か楽しみなるべき。

ねが げんぜあんのん ごしやうぜんしよ みやうほう たも

願わくは、「現世安穩、後生善処」の妙法を持つのみこ

こんじやう みやうもん ごぜ ろういん

そ、ただ今生の名聞、後世の弄引なるべけれ。すべから

こころ いた なんみやうほうれんげきやう われ とな た すす

く、心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱え他をも勧め

こんじやうにんかい おも で

んのみこそ、今生人界の思い出なるべき。

じみやうほつけもんどうしやう

030 持妙法華問答抄

じんせい い かた

人生・生き方 519 ページ 2 行

じやつこう みやこ ほとけ す せかい

寂光の都（仏の住む世界）でなかったならば、どこもすべて

くる せかい しんじつ さと すみか じゃつこう みやこ どうい

苦しみの世界なのです。真実の悟りの栖（寂光の都と同意）を

はな なに たの ねが

離れて、何が楽しみとなるのでありましょうか。願うことには、

げんせ あんのん のち ぜんしよ う みようほう

「現世は安穩にして、後には善処に生まれる」との妙法をたもつ

こんじよう しんじつ めいよ みらいせ ぼだい げんいん

ていくことだけが今生の真実の名誉であり、未来世の菩提の原因

こころ ひと なんみようほうれんげきよう

となるのです。どこまでも心を一つにして、南無妙法蓮華経と

じぶん とな ひと にんげん す

自分も唱え、人にもすすめていくことだけが、人間として過ごした

こんじよう おも で

今生の思い出となるのです。

かな

いた

われ

むし

このかた

むみよう

さけ

悲しいかな、痛ましいかな。

我ら無始より已来、無明の酒

よ

ろくどうししょう

りんね

とき

しょうねつ

だいししょうねつ

に酔って六道四生に輪回して、ある時は焦熱・大焦熱の

ほのお

咽

とき

ぐれん

だいぐれん

こおり

閉

炎にむせび、ある時は紅蓮・大紅蓮の氷にとじられ、あ

とき

がき

けかち

かな

あ

ごひやくししょう

あいだおんじき

な

る時は餓鬼の飢渴の悲しみに値って五百生の間飲食の名

き

とき

ちくししょう

ざんがい

くる

ちい

をも聞かず。ある時は畜生の残害の苦しみをうけて、小

おお

呑

みじか

なが

巻

さは大きなるにのまれ、短きは長きにまかる。これを

ざんがい

く

い

とき

しゆら

とうじょう

く

残害の苦と云う。ある時は修羅の鬪諍の苦をうけ、ある

とき

にんげん

う

はつく

受

しょう

ろう

びょう

し

あいべつ

時は人間に生まれて八苦をうく。生・老・病・死・愛別

りく

おんぞうえく

ぐふとつく

く

ごじょうおんくとう

とき

離苦・怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦等なり。ある時は

てんじよう

う

ごすい

さんがい あいだ

天上に生まれて五衰をうく。かくのごとく三界の間を

しやりん

まわ

ふし なか

おや おや

こ こ

車輪のごとく回り、父子の中にも、親の親たる、子の子た

覚

ふうふ

あ あ

あ あ

ることをさとらず。夫婦の会い遇えるも、会い遇いたるこ

知

まよ

ようもく

ひと

くら

ろうげん

とをしらず。迷えることは羊目に等しく、暗きことは狼眼

おな

われ

う

はは

ゆらい

知

しょう

う

に同じ。我を生みたる母の由来をもしらず、生を受けた

わ み

し お

る我が身も、死の終わりをしらず。

う

がた

にんかい

しょう

受

あ

がた

によらい

ああ、受け難き人界の生をうけ、値い難き如来の

しょうぎよう

あ

たてまつ

いちげん

かめ

う

ぎ

あな

遭

聖教に値い奉れり。一眼の亀の浮き木の穴にあえるが

こんど

しょうじ

絆

切

さんがい

ろうはん

い

ごとし。今度もし生死のきずなをきらず、三界の籠樊を出

でござらんこと、悲かなしかるべし、かなしかるべし。

034 (聖愚問答抄上

しょうぐもんどうしやうじやう

人生・生き方じんせい い かた 545 ページ 2 行

ほつけ ぎようじゃ

とんよく とんよく

しんに しんに

法華の行者は、貪欲は貪欲のまま、瞋恚は瞋恚のまま、

ぐち ぐち

ふげんぼさつ ぎようほう

こころう

愚癡は愚癡のまま、普賢菩薩の行法なりと心得べきなり

おんぎくでん

095 御義口伝

じんせい

い

かた

人生・生き方

1092

ページー12行

おな 恥

こんじよう

物 数

同じはじなれども、今生のはじはもののかずならず、た

ごしよう

たいせつ

ごくそつ

奪 衣 婆 けんねおう

だ後生のはじこそ大切なれ。獄卒・だつえば・懸衣翁が

さんずのかわ

端

衣 装

剥

とき おぼ

三途河のはたにていしようをはがん時を思しめして、

ほけきよう

どうじよう

たも

ほけきよう ごしよう

恥

法華経の道場へまいり給うべし。法華経は後生のはじを

隠 ころも

かくす衣なり。

じやくにちぼうごしよ

(113 寂日房御書

じんせい い かた

人生・生き方 1270 ページー4 行)

はじ

おな はじ

こんじよう げんせ はじ

恥というものは、同じ恥であつても、今生（現世）の恥はもの

ごしよう

はじ

たいせつ

ごくそつ

のかずではありません。ただ、後生の恥こそ大切なのです。獄卒や

だつえ ば けんねおう さんず かわら はし いしやう と

奪衣婆、懸衣翁、三途の河原の端で、衣装をはぎ取るときのことを

おも ぼけきやう ごほんぞん しゆぎやう どうじやう まい

思いやつて、法華經（御本尊）修行の道場へ参られるべきです。

ほけきやう ごほんぞん ごしやう はじ ころも

法華經（御本尊）は後生の恥をかくす衣なのです。

ひと

人もまたかくのごとし。

せけん あさ

世間の浅きことには身命を失え

だいじ ぶつぼう

ども、大事の仏法なんどには捨つること難し。故に仏に

成 ひと

なる人もなかるべし。

さ どころしよ

122 佐渡御書

じんせい い かた

人生・生き方 1285 ページー6 行

にんげん

おな

せけん

せいめい

人間もまたこれと同じで、世間のつまらないことで生命をうしな

ぶつぼう

いのち す

うことはあつても、たいせつな仏法のために命を捨てることはめつ

ほとけ

ひと

たにないのです。したがって仏になる人も、なかなかいないのでは

ないでしょうか。

ろくどうししよう しゅじょう なんによ なんによ みな われ せんじよう

六道四生の衆生に男女あり。この男女は皆、我らが先生

ふぼ

の父母なり。

(
164 法蓮抄 ほうれんしよう

じんせい い かた 人生・生き方 1420 ページー15 行

ろくどうししよう しゅじょう だんじよ

六道四生の衆生には男女があります。この男女は皆、過去世

わたし ふぼ

では私たちの父母だったのです。

によにん

譬

ふじ

まつ

しゆゆ

女人はたとえば藤のごとし。おところは松のごとし。須臾も

離

た

はなれぬれば立ちあがることなし。

どうしようどうみようごしよ

（193 同生同名御書

じんせい

い

かた

人生・生き方

1519

ページー5行

じんしん

う

つめ

うえ

つち

じんしん

たも

くさ

人身は受けがたし、爪の上の土。人身は持ちがたし、草の

うえ

つゆ

ひやくにじゅう

たも

な

腐

し

上の露。百二十まで持つて名をくたして死せんよりは、

い

いちにち

な

上

たいせつ

生きて一日なりとも名をあげんことこそ大切なれ。

すしゅんてんのうごしよ

さんしゅざいほうごしよ

(210 崇峻天皇御書 (三種財宝御書))

じんせい

い

かた

人生・生き方 1596 ページ 6 行

にんげん

う

むずか

つめ

うえ

つち

人間として生まれてくることは難しいことで、爪の上にいる土

すく

にんげん

う

が少くないように、ごくまれなことなのです。たとえば人間として生まれ

せいめい

むずか

たいよう

のぼ

たとしても、その生命をたもつことは難しく、太陽が昇れば、す

き

くさ

うえ

つゆ

ぐ消えてしまう草の上の露のようにたよりないものなのです。

ひやくにじゅっさい

ながい

おめい のこ

し

い

百二十歳まで長生きしたとしても、汚名を残して死ぬよりは、生

いちにち

な

たいせつ

りっぱ

きて一日でも名をあげることのほうが大切（立派）なことなので

す。

ほめられぬれば我が身の損ずるをもかえりみず、そしられ
ぬる時はまた我が身のやぶるるをもしらずふるまうこと
は、凡夫のことわざなり。

（280 諸法実相抄）

人生・生き方 1791 ページ 3 行

ほめられればたとえ自分の身体をいためることをもかえりみず、ま
た非難されれば自分の破滅をも忘れて行動するのが凡人の常なので
す。

されば、昔は一切の男は父なり、女は母なり。しかる
あいだ、生々世々に皆恩ある衆生なれば、皆仏になれると
思うべきなり。

(305 上野殿御消息 (四徳四恩の事))

人生・生き方 1851 ページ 12 行

ですから、昔 (過去世) は一切の男が (自分の) 父であり、
女は母なのです。そういうわけで、生々世々に皆、恩のある
衆生なのですから、皆が仏になれるようにと願うべきなのです。

雪 重

寒 責 そうつろう

み 冷

いし

ゆきはかさなり、かんはせめ候。身のひゆること石のご

むね 冷 こおり

とし。胸のつめたきこと氷のごとし。

酒 温 差 沸 乾 薑

しかるに、このさけわたたかにさしわかして、かんこう

食 き いちど 飲 そうつら ひ むね 焚

をはたとくい切つて、一度のみて候えば、火を胸にたく

湯 い 似 汗 垢 洗 滴

がごとし。ゆに入るにいたり。あせにあかあらい、しずく

あし 濯 おんこころざし 嬉

に足をすすぐ。この御志はいかんがせんと、うれしく

思 そうつろう りようがん 一 涙 浮

おもい候ところに、両眼よりひとつのなんだをうかべ

そうつろう

て候。

うえのどののははごぜんごへんじ だいしようにん おんやまい こと

人生・生き方
じんせい
い
かた
1926
ページ
13
行

しょうじむじよう

ろうしようふじよう

さかい

徒

果

無

よ

なか

生死無常、老少不定の境、あだにはかなき世の中に、た

ちゆうや

こんじよう

たくわ

おも

ちようせき

げんぜ

わざ

だ昼夜に今生の貯えをのみ思い、朝夕に現世の業をの

ほとけ

うやま

ほう

しん

むぎよう

むち

みなして、仏をも敬わず法をも信ぜず、無行・無智にし

あ

く

えんま

ちようてい

ひ

むか

ていたずらに明かし暮らして、閻魔の庁庭に引き迎えら

とき

なに

しりよう

さんがい

ちようと

い

なに

れん時は、何をもつてか資糧として三界の長途を行き、何

せんぼつ

しろうじ

こうかい

わた

じつぽう

じやつこう

をもつて船筏として生死の曠海を渡つて実報・寂光の

ぶつど

いた

仏土に至らんや

まつのどのごへんじ

じゅうしひぼう

こと

(374 松野殿御返事 (十四誹謗の事))

じんせい

い

かた

人生・生き方 1990 ページ 3 行

あくしよ

おうい

しょうぐん

もの

ごくそつ

かかる悪所にゆけば、王位・将軍も物ならず。獄卒の

かしやく

値

すがた

さる

回

こと

とき

呵責にあえる姿は、猿をまわすに異ならず。この時は、

みようもんみようり

がまんへんしゅうあ

いかでか名聞名利・我慢偏執有るべきや。

にいけごしよ

(400 新池御書

じんせい

い

かた

人生・生き方 2063 ページ 4 行)

わる ところ

じごく

おう

くらい

しょうぐん

このような悪い所 (地獄) へいけば、王の位も将軍という

かたが

なん

やく

じごく

やくにん

すがた

肩書きも何の役にもたちません。地獄の役人にせめられる姿は、

さる

さる

あつか

おな

せけん

猿が猿まわしに扱われているのと同じです。このときは、世間のど

めいよ

ざいせん

まんしん

へんしん

なん

やく

んな名誉も財産も、慢心も偏心も何の役にもたたなくなってしまう

のです。

ああ、過ぎにし方のほどなきをもつて知んぬ。我らが

いのち いまいく

はる あした はな 詠 とき

命、今幾ほどもなきことを。春の朝に花をながめし時

伴 あそ ひと はな

むじよう あらし ち 果

ともない遊びし人は、花とともに無常の嵐に散りはて

な のこ ひと 亡

はな ち

て、名のみ残りてその人はなし。花は散りぬといえども、

来 しゅん ひら

き ひと

またこん春も発くべし。されども消えにし人は、またい

よ きた

あき く つき なが ときたわむ

かならん世にか来るべき。秋の暮れに月を詠めし時戯れ

睦 ひと

つき うい くも い のち おもかげ

むつびし人も、月とともに有為の雲に入つて後、面影ばか

み 添 もの言

つき せいざん い

り身にそいて物いうことなし。月は西山に入るといえど

来 しゅう なが

隠 ひと

も、またこん秋も詠むべし。しかれども、かくれし人は

いま
今いづくにか住みぬらん、おぼつかなし。

むじよう　とら　咆　こえ　みみ　近

無常の虎のなく音は耳にちかづくといえども、聞いて

おどろ　としよ　ひつじ　いまいくか　むじよう　みち　あゆ

驚くことなし。屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん。

せつせん　かんくちよう　かんく　責　よあ　す　作

雪山の寒苦鳥は、寒苦にせめられて、夜明けなば栖つく

な　ひい　あさひ　暖

らんと鳴くといえども、日出でぬれば、朝日のあたたかな

ねむ　わす　す　いっしょうむな　な

るに眠り、忘れて、また栖をつくらずして一生虚しく鳴

得　いっさいしめじよう　じごく

くことをう。一切衆生もまたまたかくのごとし。地獄に

お　ほのお　咽　とき　ねが　こんどにんげん　う

堕ちて炎にむせぶ時は、願わくは今度人間に生まれて、

しよじ　さしお　さんぼう　くよう　ごせぼだい　助　ねが

諸事を闇いて三宝を供養し、後世菩提をたすからんと願

にんげん

きた

とき

みようもんみょうり

かぜ

激

えども、たまたま人間に来る時は、名聞名利の風はげし

ぶつどうしゆぎよう

ともしび

き

むやく

ざいほう

く、仏道修行の灯は消えやすし。無益のことには財宝

尽

惜

ぶつぼうそう

少

くよう

をつくすにおしからず、仏法僧にすこしの供養をなすには

物

憂

おも

じごく

これをものうく思うこと、これただごとにあらず。地獄の

つか

競

すんぜんしやくま

もう

使いのきおうものなり。寸善尺魔と申すはこれなり。

にいけごしよ

400 新池御書

じんせい

い

かた

人生・生き方

2063

ページー17行